

〔報告〕

岐阜県内看護職のキャリア発達に関する調査 第3報
—編入学を希望する看護職の要因分析と編入学への期待—

グレッグ美鈴¹⁾ 池 邊 敏 子¹⁾ 池 西 悦 子²⁾ 林 由美子²⁾
橋 本 波 枝³⁾ 平 山 朝 子⁴⁾

Career Development of Nurses in Gifu Prefecture, Part 3 :
Analyzing Factors Related to the Desires and Expectations for a RN to BN Program

Misuzu F. Gregg¹⁾, Toshiko Ikebe¹⁾, Etsuko Ikenishi²⁾, Yumiko Hayashi²⁾
Namie Hashimoto³⁾, and Asako Hirayama⁴⁾

はじめに

看護系大学における編入学制度は、1976年に聖路加看護大学で導入されて以来20数年を経て、1999年には全看護系大学76校中、50の大学で実施されている¹⁾。編入学制度は当初、短期大学卒業者を対象としたが、1998年6月に公布された学校教育法の一部改正により、1999年4月から「一定の基準を満たす者」、すなわち専修学校の専門課程（専門学校）の卒業者の入学が可能になった²⁾。

本学は、平成14年度から県内で働く専修学校卒業者で、卒業後に県内で働く意志のある看護職を対象に編入学を開始する。これは、看護系短期大学の卒業生が1割未満であり、大多数が専修学校卒業者で構成されている県内の編入学対象者のニーズを反映している。また入学者を県内で働く者に限定する背景には、本学が教育・研究機関として、県内看護職の看護実践の改革を実践現場との連携と協働によって実現しようとしていることがある。したがって編入学の対象となる看護職のニーズ調査は、生涯学習支援の一環として編入学教育を充実し、県内看護職の資質の向上に寄与する資料となる。本研究の目的は、編入学試験受験意志のある者の特性、本学の制度に対する認識、受験に影響する要因、および編入学への期待を明らかにすることである。

I. 研究方法

対象者の抽出、調査方法、および調査期間は、第1報に準ずる。

1. 分析対象者

本研究の分析対象者は、本学の編入学試験受験資格を持つ看護職、すなわち高等学校を卒業し、専修学校の専門課程を修了して看護職免許を有する者である。さらに本学では、3年以上の実務経験を受験資格にしているが、調査時点で3年以上経ってから受験したいと答えた者もあり、実務経験年数で分析対象者を限定しないこととした。これらの条件を満たす看護職者数は5,930名であり、有効回答数の59.5%であった。

2. 調査項目

分析に用いた調査項目は、対象者の特性として年齢、性別、一般学歴、看護基礎教育課程以外に、編入学による生活スタイルの変化を考慮し、世帯構成や現在の職業、看護経験年数を加えた。さらに本学の制度に対する認識など受験動機に関わると考えられる要因を追加した。受験に影響する要因は、現在の職業、個人的条件、家族の援助、入学試験、編入学後のことなどを研究者間で吟味した。編入学への期待については、先行研究^{3,4)}を参考に質問項目を作成した。質問紙は、臨床看護婦5名と保健

1) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing
2) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing
3) 岐阜県医療整備課 Medical Treatment Management Division, Gifu Prefectural Government
4) 岐阜県立看護大学 学長 President, Gifu College of Nursing

婦経験を持つ教員4名を対象としてプレテストを実施し、対象者から具体的な意見をもらい、修正を行った。

II. 結果

編入学試験の受験意志を「ある」、「ない」、「わからない」の3群に分類した。受験意志のある群は526名(8.9%)、ない群は2,235名(37.7%)、わからない群は2,850名(48.0%)、無回答が319名(5.4%)であった。分析対象者の73.5%は、本調査によって編入学の実施を知った者であるが、調査時点で受験するか否かの意志決定がなされた群を比較することにより、編入学を希望する看護職の要因を明らかにする。

1. 対象者の特性の比較

受験意志の有無と一般的特性を比較すると(表1)、受験意志のある群は、性別では男性が有意に多く($\chi^2=27.925$, $df=1$, $p<0.001$)、年齢では、35歳未満の者が有意に多かった($\chi^2=40.587$, $df=1$, $p<0.001$)。受験意志のある群の最少年齢は20歳、最高年齢は58歳であった。さらに受験意志のある群は、配偶者のいない者が有意に多く($\chi^2=20.280$, $df=1$, $p<0.001$)、子どものいない者が有意に多かった($\chi^2=20.976$, $df=1$, $p<0.001$)。

受験意志の有無と学歴・職業経験を比較すると(表1)、受験意志のある群は、勤務場所では病院が有意に多く($\chi^2=4.993$, $df=1$, $p<0.05$)、看護経験年数では、10年未満の者が有意に多かった($\chi^2=24.353$, $df=1$, $p<0.001$)。さらに受験意志のある群は、これまでに看護系大学の卒業者と一緒に働いた経験を持つ者が有意に多く($\chi^2=9.078$, $df=1$, $p<0.01$)、現在の仕事には満足していない者が有意に多かった($\chi^2=19.935$, $df=1$, $p<0.001$)。受験意志の有無と一般学歴、看護基礎教育課程、現在の職種および職位の間には有意な差を認めなかった。

2. 本学の制度に対する認識の比較

受験意志のある群の本学の制度に対する認識(表2)では、専修学校卒業者の編入学の実施を知っていた者が有意に多く($\chi^2=54.754$, $df=1$, $p<0.001$)、またその必要性を認める者が有意に多かった($\chi^2=57.029$, $df=1$, $p<0.001$)。さらに受験意志のある群は、本学の科目等履修生制度を利用すると答えた者が有意に多く

表1 対象者の特性と編入学試験受験意志との関係

	受 験 意 志		
	ある	ない	わからない
一般的特性			
性別 (N=5,611)			
男性	7.6	2.8	3.4
女性	92.4	97.2	96.6
	└──***──┘		
年齢 (N=5,611)			
35歳未満	68.8	53.5	64.7
35歳以上	31.2	46.5	35.3
	└──***──┘		
配偶者 (N=5,611)			
あり	44.9	55.7	46.9
なし	55.1	44.3	53.1
	└──***──┘		
子ども (N=5,611)			
あり	38.4	49.5	40.1
なし	61.6	50.5	59.9
	└──***──┘		
学歴・職業経験			
一般学歴 (N=5,611)			
短期大学卒業以上	9.5	8.4	8.4
高等学校卒業	90.5	91.6	91.6
看護基礎教育課程 (N=5,611)			
専門学校3年課程	73.2	75.4	74.9
専門学校2年課程	26.8	24.6	25.1
現在の職種 (N=5,603)			
看護婦・士	87.8	89.4	89.9
それ以外	12.2	10.1	10.6
現在の職位 (N=5,509)			
管理職	22.9	26.8	21.8
それ以外	77.1	73.2	78.2
現在の勤務場所 (N=5,599)			
病院	89.1	85.4	88.0
それ以外	10.9	14.6	12.0
	└── * ─┘		
看護経験年数 (N=5,540)			
10年未満	65.6	53.6	63.0
10年以上	34.4	46.4	37.0
	└──***──┘		
看護系大学卒業者との仕事の経験 (N=4,612)			
あり	44.2	36.5	41.9
なし	55.8	63.5	58.1
	└── ** ─┘		
現在の仕事に対する満足 (N=2,712)			
満足している	42.4	57.2	50.4
満足していない	57.6	42.8	49.6
	└──***──┘		

注)* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$, 数値は百分率を示す

表2 本学の制度に対する認識と受験意志との関係

	受 験 意 志		
	ある	ない	わからない
専修学校卒業者の編入学 実施の認知 (N=5,540)			
知っていた	38.1	22.4	27.6
知らなかった	61.9	77.6	72.4
	└── *** ─┘		
専修学校卒業者の編入学 制度の必要性 (N=3,354)			
必要である	99.3	86.9	98.2
必要でない	0.7	13.1	1.8
	└── *** ─┘		
科目等履修生 制度の利用 (N=2,344)			
利用したい	98.8	37.7	93.6
利用したくない	1.2	62.3	6.4
	└── *** ─┘		
共同研究の希望 (N=2,768)			
あり	53.0	7.8	25.4
なし	47.0	92.2	74.6
	└── *** ─┘		

注) *** $p<0.001$, 数値は百分率を示す

($\chi^2=416.533$, $df=1$, $p<0.001$), 本学教員との共同研究を希望する者が有意に多かった ($\chi^2=351.821$, $df=1$, $p<0.001$).

受験意志のある群のうち61.9%は、本調査の実施前に専修学校卒業者の編入学の実施を知らなかった。また受験意志のない群でも86.9%の人は、専修学校卒業者の編入学制度の必要性を認めていた。

3. 編入学試験受験に影響する要因の比較

受験するか否かを決めるときに影響する要因について(表3), 受験意志のある群とない群の間で有意な差を認めたのは、卒業後の同じ職位への復帰保障($\chi^2=5.927$, $df=1$, $p<0.05$), 基礎看護教育課程で取得した単位の認定($\chi^2=11.688$, $df=1$, $p<0.01$), 大学での学業に不安を感じることに($\chi^2=6.728$, $df=1$, $p<0.01$), 大学生活に不安を感じることに($\chi^2=13.942$, $df=1$, $p<0.001$), 自分の年齢的条件($\chi^2=38.269$, $df=1$, $p<0.001$), 地理的な条件($\chi^2=56.725$, $df=1$, $p<0.001$)の6項目であった。このうち基礎看護教育課程で取得した単位の認定のみは、受験意志のある群に影響しないと答えた者が有意に多かった。

在学中の休職・給与保障・勤務調整の受験への影響については、受験意志のある群とない群の間に有意な差は認めなかった。編入学をした場合に現在の仕事をどうし

表3 編入学試験受験に影響する要因と受験意志との関係

	受 験 意 志		
	ある	ない	わからない
在学中の休職 (N=4,725)			
影響する	4.3	3.8	3.0
影響しない	95.7	96.2	97.0
在学中の給与保障 (N=4,908)			
影響する	4.1	3.2	2.6
影響しない	95.9	96.8	97.4
在学中の勤務調整 (N=4,546)			
影響する	5.0	4.6	3.0
影響しない	95.0	95.4	97.0
卒業後の同じ職位への復帰保障 (N=4,350)			
影響する	11.5	7.8	6.5
影響しない	88.5	92.2	93.5
	└── * ─┘		
奨学金が受けられること (N=4,005)			
影響する	9.2	9.6	7.2
影響しない	90.8	90.4	92.8
家族の援助が受けられること (N=4,368)			
影響する	13.8	10.8	10.0
影響しない	86.2	89.2	90.0
基礎看護教育課程で取得した単位の認定 (N=4,269)			
影響する	1.6	5.4	2.1
影響しない	98.4	94.6	97.9
	└── ** ─┘		
入学試験で専門的知識が問われると思うこと (N=4,038)			
影響する	4.3	3.9	3.4
影響しない	95.7	96.1	96.6
入学試験で語学力が問われると思うこと (N=4,224)			
影響する	1.9	3.8	2.5
影響しない	98.1	96.2	97.5
大学での学業に不安を感じることに (N=4,042)			
影響する	10.4	6.5	6.0
影響しない	89.6	93.5	94.0
	└── ** ─┘		
大学生活に不安を感じることに (N=3,565)			
影響する	22.8	14.5	14.6
影響しない	77.2	85.5	85.4
	└── *** ─┘		
自分の年齢的条件 (N=4,103)			
影響する	22.9	11.0	12.6
影響しない	77.1	89.0	87.4
	└── *** ─┘		
地理的な条件 (N=3,967)			
影響する	31.1	14.5	17.6
影響しない	68.9	85.5	82.4
	└── *** ─┘		

注) * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$, 数値は百分率を示す

たいかでは、休職を希望する者が43.3%と最も多いが、実際にはどうなると思うかでは、退職と答えた者が45.4%と最も多かった。393名の管理者から回答を得たキャリア発達のための諸制度では、無給休職制度を持つ施設は18.1%、全額有給休職制度は8.7%、保険料のみ負担する休職制度は6.6%であった。

奨学金や家族の援助が受けられること、さらに入学試験で専門的知識や語学力が問われると思うことの受験への影響については、受験意志のある群とない群の間に有意な差は認めなかった。

4. 編入学試験受験意志に関わる主な変数の抽出

受験意志のある群とない群の間に有意な差を認めた変数は、性別、年齢、配偶者の有無、子どもの有無、現在の勤務場所、看護経験年数、看護系大学卒業者との仕事の経験、現在の仕事に対する満足、専修学校卒業者の編入学実施の認知、専修学校卒業者の編入学制度の必要性、本学の科目等履修生制度の利用、本学教員との共同研究の希望、卒業後の同じ職位への復帰保障、基礎看護教育課程で取得した単位の認定、大学での学業に不安を感じること、大学生活に不安を感じること、自分の年齢的条件、地理的な条件の18変数であった。これらの変数のうち、編入学制度の必要性については、受験意志のある群と強い関連が予測されるため分析から除外した。したがって17変数を説明変数とし、受験意志のある群・ない群を目的変数として多重ロジスティックモデルを用いて分析し、両群の判別に影響する変数を抽出した(表4・5)。モデルの適合率は82.0%であった。多重ロジスティック分析は、各変数の相互作用を調整・排除し、各変数が他の説明変数に影響されることなく両群の差を説明する程度を算出できる。この結果、子どもがいない、共同研究を希望する、科目等履修生制度を利用したいの3つが受験意志のある群を特徴づける主な変数であった。

この分析により、子どものある者が編入学試験を受験する可能性は、子どものない者の0.21倍と少なく、共同研究を希望する者は、希望しない者の3.02倍、科目等履修生制度を利用したい者は、利用したくない者の26.91倍、編入学試験を受験する可能性が高いことが明らかになった。さらに修正オッズ比が95%信頼区間に1を含まず、3変数の修正オッズ比は有意な差を認めるといえる。

表4 多重ロジスティックモデルによる
受験意志のある群の判別変数

変 数	回帰係数	標準誤差	有意確率
子ども			
あり	-1.578	0.461	0.001
共同研究の希望			
あり	1.107	0.475	0.020
科目等履修生 制度の利用			
したい	3.293	0.780	0.000

表5 受験意志のある群の修正オッズ比

変 数	修正オッズ比
子ども	
なし／あり	1.00／0.21 (0.08, 0.51)
共同研究の希望	
なし／あり	1.00／3.02 (1.19, 7.68)
科目等履修生制度の利用	
したくない／したい	1.00／26.91 (5.84, 124.13)

() : 95%信頼区間

5. 編入学への期待

編入学後、大学で何を学び・得たいかという編入学への期待を表明した者は、1,665名で受験資格を持つ者の28.1%であった。期待している内容は(表6)、「学士を取得したい」が72.1%と最も多く、次いで「看護研究能力を育成したい」が35.3%、「看護婦・士以外の免許を取得したい」が33.8%であった。

Ⅲ. 考察

本学の編入学試験受験資格を持つ者のうち、調査時点で受験意志があると答えた者は8.9%であり、開学前の調査⁵⁾で本学に編入学したいと答えた者の6.9%より若干増加している。専修学校を卒業した看護職の学位取得に関する全国規模の調査^{6,7)}では、看護学士を取得したいという希望を持つ者は、12～14%と本調査結果より多い。しかし全国調査の対象者の30～50%が学位取得ニーズの高い看護教員であることを考慮すると、本調査の編入学希望者が全国調査に比べて少ないとはいえない。

1. 対象者の特性

受験意志のある群では、性別は対象となった絶対数は少ないものの、男性の看護職が有意に多く、また35歳未満の者が有意に多かった。受験意志と職位の間には有意な差は認めなかったが、年齢が若いほど管理職に就いている割合は少なく、職場を離れて学習することに抵抗が少ないと考えられる。同様に、配偶者や子どものいない

表6 編入学への期待

	N=1,665		
	当てはまる	どちらとも いえない	当てはまらない
幅広い知識を得たい	2.9	6.7	90.4
人間理解を深めたい	5.9	21.3	72.8
豊かな人間性を育成したい	5.9	20.6	73.5
自由な発想, 柔軟な思考力を育てたい	4.7	17.9	77.4
看護実践の根拠を明らかにしたい	6.3	20.4	73.3
自律・自立して問題解決に当たる能力を育成したい	4.6	19.3	76.1
看護を継続して学びたい	5.9	19.7	74.4
看護婦・士以外の免許を取得したい	33.8	23.2	43.0
学士を取得したい	72.1	17.2	10.7
看護研究能力を育成したい	35.3	27.5	37.2

注) 数値は百分率を示す

者が受験意志のある群に有意に多かったのも、フルタイムで学びやすいためであろう。受験意志のある者が若く単身であるという結果は、専修学校卒業者の学位取得ニーズの調査結果⁹⁾と一致する。

一般学歴では、短期大学卒業以上の者は高校卒業者に比し受験意志のある者が多いが、有意な差は認めなかった。同様に看護基礎教育課程では、専門学校2年課程の方が受験意志のある者が多いが、有意な差は認めなかった。受験意志は、一般学歴や看護基礎教育課程の修業年限に関係していなかった。

職業経験に関しては、現在の職種が看護婦・士以外の者に受験意志のある者が多く、また管理職以外の者に受験意志のある者が多いが、有意な差は認めなかった。現在の勤務場所では、受験意志のある群は病院に勤務する者が有意に多かった。臨床看護婦は7年目で1人前から中堅への質的転換をするといわれている⁹⁾が、臨床である程度の知識と技術を身に付けた看護職が病院の中でキャリアアップを考えると、選択肢の少ないことが編入学を選ぶ誘因になっていると考えられる。看護経験年数では、受験意志のある群は10年未満の者が有意に多かった。これは、専修学校卒業者の編入学生に実務経験10年未満の者が大半を占めるという報告¹⁰⁾と一致する。Superの職業発達理論¹¹⁾によると、25歳から44歳はキャリアの試行期を経てキャリアを確立する段階である。この段階の初期は、現実の仕事との関わりの中で試行錯誤を繰り返す時期であり、キャリアの確立に至るまでの看護職に受験意志のある者が多く、自己の職業における専門性を高め、キャリアを確立するために編入学という手段を選ぼうとしているといえる。

受験意志のある群はない群に比べて、看護系大学卒業者との仕事の経験を持つ者が有意に多く、看護系大学卒業者の仕事の肯定的評価とも捉えられる。現在の仕事に対する満足では、受験意志のある群に満足していない者が有意に多かった。現在の仕事に満足していないことは、学習動機となりキャリア発達に結びつくが、満足していない理由によっては現状からの逃避手段ともなる。

2. 本学の制度に対する認識

受験意志のある群は、本学の制度に対する認識が高く、専修学校卒業者の編入学の実施を知っていた者が有意に多かった。しかし受験意志のある群でも約6割は、本調査前には編入学の実施を知らなかったと答えているため、受験に関して十分な吟味が行われていないと思われる。受験するかどうか分からないと回答している者の約7割は、本調査前に編入学の実施を知らなかったため、編入学に関する具体的情報を得ることにより、受験を考える層と捉えることができ、この層の分析も今後必要である。

受験意志のある群に、専修学校卒業者の編入学制度の必要性を認める者が有意に多いのは当然であるが、注目すべきことは、受験意志のない群でも9割近くが制度の必要性を認めていることである。受験意志のない群に35歳以上の者が有意に多いことを考えると、これらの人たちは職場内で編入学の希望を持つ人たちを支援する立場にあり、制度の必要性を認識し積極的な支援が行われることは、将来の看護実践の質的向上にとって重要である。

さらに受験意志のある群は、本学の科目等履修生制度の利用に対しても積極的な者が有意に多く、また本学教員との共同研究を希望する者も有意に多かった。編入学

の受験意志のある人たちは、編入学のみならず、大学を通じて学ぶことに積極的であるといえる。

3. 受験に影響する要因

在学中の休職・給与保障・勤務調整、卒業後の同じ職位への復帰保障といった仕事に関連する要因の編入学試験受験への影響では、受験意志のある群に有意に多かったのは、卒業後の同じ職位への復帰保障のみであった。編入学をした場合に現在の仕事をどうしたいかでは、休職を希望する者が最も多かったが、実際にどうなると思うかでは、退職と答えた者が最も多かった。在学中の休職は実現困難という判断があり、編入学試験を受験するか否かに影響する要因として選ばれなかったと考えられる。またキャリア発達のための諸制度では、全額有給休職制度を持つ施設は1割以下であり、在学中の給与保障についてもあきらめがあると解釈できる。このような仕事上の優遇へのあきらめと異なり、卒業後に同じ職位へ復帰したいという希望を持つ人は多い。実務経験を持つ人たちが、編入学という学校教育制度の中で学ぼうとする際に、施設内にキャリア発達のための制度が確立されることは必要不可欠であろう。在学中の休職・給与保障・勤務調整、さらに卒業後の同じ職位への復帰保障が実現すれば、編入学をより身近な選択とすることが可能になる。

看護基礎教育課程で取得した単位の認定では、受験意志のある群に影響しないと答えた者が有意に多かった。編入学後、専修学校卒業者は学習姿勢が積極的で、できるだけ多くの科目を履修したいと思っている学生が目立つという報告¹²⁾があるように、受験意志のある群では、どれだけの単位が認定されるか、すなわちどれだけの単位を大学で取得しなければならないかを影響要因としていない。入学試験に関しても、専門的知識や語学力が問われると思うことの受験への影響については、受験意志のある群とない群の間に有意な差は認めず、受験科目自体は影響を与えていない。

一方、大学での学業や大学生活に不安を感じる事が受験に影響すると答えた者は、受験意志のある群に有意に多かった。今回の調査が編入学実施前に行われたことを考えると、これらの不安は、実際に編入学をした人たちから具体的な情報を得ることで軽減することが予想される。さらに自分の年齢的条件や地理的条件が影響する

と答えた者は、受験意志のある群に有意に多かった。受験意志のある群には、35歳未満の者が有意に多いが、年齢的条件を気にする理由の1つには卒業後の就職の問題もある。前述した卒業後の同じ職位への復帰保障は、この年齢的条件の影響因子を緩和する1手段となる。また岐阜県の広さや交通の便を考えると、通学が困難という地理的条件が影響する人は多いと思われる。大学近辺に住むための経済的・物理的援助を検討する必要性を示唆するものといえる。

4. 編入学試験受験意志に関わる主な変数と編入学に対する期待

今回は、県内看護職のニーズ調査の初回であり、編入学生入学前の調査であるため、調査対象者が十分な情報を得ているとはいえない。しかしそのような状況でも、受験に対して明確な意志を示した者が約半数あり、その分析結果は、間近に控えた編入学教育のあり方を考える際に活用できると考えた。多重ロジスティックモデルにより受験意志のある群とない群の判別に影響する変数を抽出したところ、子どもがいない、本学の科目等履修生制度を利用したい、本学教員との共同研究を希望するの3変数が受験意志を予測する変数であることが明らかになった。科目等履修生制度の利用と共同研究の希望が受験意志の予測変数であることは、編入学に対する期待の結果と関連している。

編入学に対する期待として多かったのは、学士の取得、看護研究能力の育成、および看護婦・士以外の免許の取得であった。科目等履修生制度の利用は、学士取得ニーズの高さと一致し、本学教員との共同研究の希望は、看護研究能力を育成したいという編入学への期待と一致する。これらは、受験意志のある群の編入学への目的の明確さと捉えることが可能である。しかし、編入学後に学びたい内容では、幅広い知識の習得、人間理解の深化、豊かな人間性の育成、自由な発想・柔軟な思考力の育成、看護実践の根拠の明確化、問題解決能力の育成、看護の継続学習は、いずれも極少数であった。これらの質問項目は、編入学の在学生および卒業生を対象とした調査^{13,14)}を参考に作成したもので、先行研究では75%から90%の選択率を持つ項目も含まれている。編入学をする以前の看護職が対象であるという調査対象者の違いは大きく、受験意志のある者も何を学びたいかを具体的にイメージ

することが困難であると思われる。一方、編入学生を受け入れる立場の教員からは、編入学の動機が「仕事上の必要性から」や「単なる学歴不安者が増えている」という指摘もある¹⁵⁾。学士取得は1つの受験動機に過ぎず、それが大学での学習経験によってどのように変化するかが重要である。学士の取得は結果であり、そのプロセスで学ぶことこそ重要であると編入学生が認識できるようになるためには、実務経験を持つ編入学生が今まで身に付けた知識・技術を大切にしながら、その上に何を積み重ねて行けるかに負うところが大きい。したがって編入学生が編入学以前の経験と編入学による経験の両方を価値付けられるようになるためには、編入学教育に対する教員の教育能力の開発が必要不可欠である。

IV. 結論

本学の編入学試験受験資格を持つ看護職を対象に、受験意志のある群の特性、本学の制度に対する認識、受験に影響する要因、および編入学への期待を調べた。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 受験意志のある群は、男性が多く、看護経験年数は10年未満で、病院に勤務する者が多かった。
- 2) 受験意志のある群は、本学の編入学の実施を知り、その必要性を認め、本学の科目等履修生制度の利用と共同研究を希望する者が多かった。
- 3) 受験意志のある群では、卒業後の同じ職位への復帰、大学生活や学業に不安を感じることで、自分の年齢や地理的条件が受験に影響する要因であった。
- 4) 受験意志を予測する変数は、子どもがいない、本学の科目等履修生制度を利用したい、本学教員との共同研究を希望するの3つであった。
- 5) 編入学への期待では、学士の取得が最も多く、次いで看護研究能力の育成、看護婦・士以外の免許の取得が多かった。

編入学の実施とともに、これらの内容は変化することが予測され、数年ごとの継続調査が必要である。

引用文献

- 1) 川村佐和子他：平成11年度事業活動報告書，日本看護系大学協議会，166，2000。
- 2) 大室律子：専門学校卒業者の大学編入が可能に—看護職の学習意欲に応える改正，看護管理，8(12)；931-934。
- 3) 山田律子他：看護職の学士取得の実態と看護系大学への進学に対するニーズ，日本看護科学学会学術集会講演集，394-395，1988。
- 4) 水野照美他：看護系大学における編入学教育の評価，日本看護学教育学会誌，10(1)；21-30，2000。
- 5) 松下光子他：岐阜県立看護大学設立準備にかかわる調査結果報告書，岐阜県健康局看護大学設立準備課，2000。
- 6) 舟島なをみ他：看護学校を卒業した看護婦(士)の学位取得に関する研究—学位取得へのニーズの有無に焦点を当てて—，Quality Nursing，3(7)；717-723，1997。
- 7) 横山京子：専門学校を卒業した看護婦(士)の学位取得ニーズと専門職的自律性に関する研究，看護教育学研究，8(1)；35-43，1999。
- 8) 前掲6)。
- 9) 豊田ゆかり他：看護婦の臨床判断能力の形成過程に関する研究—看護場面における状況判断の実態—(その1)，愛媛県立医療短期大学紀要，5；191-200，1992。
- 10) 窪田恵子他：編入学受け入れの実態—西南女学院大学保健福祉学部看護学科—，看護展望，25(4)；478-481，2000。
- 11) Super, D. E. : The psychology of careers : An introduction to vocational development, Harper & Row, 1957。
- 12) 中村裕美子：専修学校卒業の大学編入生を受け入れて—川崎医療福祉大学，看護教育，40(12)；1053-1055。
- 13) 前掲3)。
- 14) 前掲4)。
- 15) 近田敬子他：編入学制度の課題，看護展望，25(4)；470-472，2000。

(受稿日 平成14年2月21日)